

でんでら通信 第百三十三号 令和七年五月

坐禅会

五月二十八日(水) 十時に坐禅会を開催します。
みなさんのご参加をお待ちしております。

旦過話(たんがづめ)と参堂(さんどう)

ゴールデンウィークを迎え、ようやく朝晩の寒さもなくなり過ごしやすい日を迎えるようになりました。どうかするとここ近年は、早くも暑さを感じる年もありますから、熱中症などには気をつけたいものです。

さて先月の便りでは、修行道場に入門する一番最初の関門であります「庭詰め」について掲載しました。今回は、入門三日目からの「旦過話」と「参堂」についてお話しします。

入門者は、一日目、二日目と、朝から夕方まで道場の玄関の縁に頭を下げ、腰を曲げて座り続けます。三日目からは、玄関から上に上げてもらい、座敷の一室を与えられ、そこで一日中坐禅をします。座敷はすべての障子戸、襖戸が開けっ放しで、どこから見られているかわかりませんので、しっかりと坐禅をしなければなりません。さぼっていると「しっかりと座るように」と小言を言われます。まったく油断も隙ありません。

「しっかりと己事究明に励みなさい」と言わんばかりに、座敷の床の間には、禅語の掛け軸が掛けられています。まったく今まで生きてきた中で、一日中

何もせず、ただ座って時間が過ぎるのを待っていることは、想像以上に辛いものです。僧堂ならではの入門試験です。願心が試されます。

高単の雲水(先輩の修行者のこと)の中には、今までの半生を振り返ってどれだけの人のおかげで、今のあなたがここにおられるのか考えなさい、ということをおっしゃる方もみえることがありますが。修行に入るためには、心身共に健康で、他に憂慮することも大きな悩みもなく、出家するにあたり快く送り出してくれた家族、友人などに感謝し、この道場に身を置ける幸せを入門にあたり心にとめておきなさいということでしょう。

私事ですが、私が僧堂に入門した時には、この旦過話めで、帰って行ってしまった人がいました。

何か思うところがあつたのでしょうか。急に荷物を持って高単の雲水さんのところへ挨拶して玄関から出て行ってしまいました。「えー行っちゃうのかよ」と同期入門者が減ってしまった驚いた覚えがあります。あの人はあれから送り出してくれたお寺に何と言って帰っていったんだろうと思ったものです。

さて三日、四日、五日と長い三日間が過ぎた五日目の晩になると、知客寮(しかりよう)という雲水の取締役の方が、座敷に入ってきて、

「今までずいぶんとお断りしてきたが、貴公はなかなか願心も堅いようだし、ちょうど今、欠員もできたので明日の朝、参堂を許しましょう」

と、まったく人を喰ったような話ですが、どうにか五日間の苦行を無事に通過、入門の許可をいただく運びとなります。

翌日の朝、朝のお勤め、朝食と済ましてから、知客寮さんに連れられて、廊下を渡った別棟の禅堂へ入ることとなります。お堂に入ると、中は一面敷瓦、一段高くなった畳敷きにはズラリと先輩の雲水が並んで座っている。正面には、文殊菩薩(聖僧さま)が祀られています。

案内の指示に従い、この聖僧さまの前で線香を供え三回拝を行い(三回膝をついて頭を下げる)これからの修行の無事を祈る。そしてこの禅堂の一番端に座っている雲水(直日、じきじつといいます)に抵頭(頭を下げる)、これからよろしくお願いしますという意味のあいさつをして、自分の席である坐禅用座布団に座る。すると、「新到、参堂！」(しんどう、さんどう)という大声が発せられ、堂内に坐禅していた先輩雲水が一斉に頭を下げる。これで雲水の仲間入りです。自己紹介もなく、挨拶の言葉もない。まさに簡潔、厳粛な入門儀式です。

三月下旬、無事に長男も参堂できまして、と報告がありました。いよいよこれからが本格的な修行の始まりです。

